

キリスト教教育学とは何か

深 谷 潤

What is Christian Education?

Jun Fukaya

キリスト教教育学とは、広くキリスト教教育について研究する学問である。キリスト教教育は、キリスト教神学に基づき、教会、キリスト教学校・園、家庭、キリスト教関連諸団体・施設等において、福音に沿った生活を行うための教育的活動である。従来から、宣教を目的とした教育と信仰共同体の一員のための訓練の二側面が主に協調されてきた。しかしながら、今日、キリスト教教育の意味を社会・文化的文脈を看過せずに定めることはできず、それに応じて常にキリスト教教育の意味も変化する。ここでは、その定義づけの困難さを前提としつつ、過去どのようにキリスト教教育が捉えられ、「キリスト教教育学」として位置づけられてきたのかを説明する。近代の教育学 (pedagogy) は、19世紀にヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 1776-1841) が人間形成の学として成長発達のマカニズムを解明し、教育学が総合的学問として成立し得ることを主張したことに端を発する。他方、キリスト教教育の実践は、すでに5世紀初頭、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354-430) の『教えの手ほどき』にもみられる¹⁾。さらに、教会における神学の実践的分野に関しては、ルター (Martin Luther 1483-1546) が「大教理問答」「小教理問答」をまとめ、カテキズム教育として実践されてきた。ここでは、20世紀以降のキリスト教教育の学問的特徴に関して説明する。

20世紀初頭、欧米のキリスト教教育は、人間の主体的な判断に基づいて神学を探究しようとする自由主義神学 (シュライエルマッハー、リッチェル、

ハルナック等)の影響を主に受けていた。自由主義神学と進歩主義的教育理論に基づき、1903年、Religious Education Associationがシカゴに設立された。他方、1900年前後から1940年代にいたる宗教教育運動がおこり、ホーレス・ブッシュネル(Horace Bushnell, 1802-1876)の『キリスト教養育』(Christian Nurture, 1867)は、その宗教教育理論をリードした。²第一次世界大戦後、1930年代頃から、自由主義神学を批判する弁証法神学(バルト、ブルナー、ゴーガルテン、ブルトマン等)の影響を受けながら、ドイツを中心に福音主義教育学(Die evangelische Pädagogik)が展開された。ファーバー(Hermann Faber)は、当時の福音主義教育学について“Religionspädagogische Probleme”(宗教教育学の諸問題)と題した論文の中で、神学と教育学の専門性に関する問題点に関し、代表的な福音主義教育学者の議論を紹介した。彼は、福音と教育との関係性を連続的に捉えるグループと、非連続的に捉えるグループに分けている。前者の代表的人物は、オットー・エバーハルト(Otto Eberhard)であり、哲学的・福音主義的教育学を示した。彼は、福音主義的教育学と一般的教育学が分離したものではなく、一般的教育学の基盤として、福音主義的教育学が内実的に組み込まれうるという。これを、彼は信仰に基づく教育学(Pädagogik aus Glauben)と呼んでいる。

後者、非連続的立場をとる教育学者の代表的一人のフレール(Kurt Frör 1905-1980)は、福音主義的教育学が、人文主義的、自然主義的、マルクス主義的、民族主義的教育学、すなわち非福音主義的、非キリスト教的教育学と対立すると考えている。(背景には、対ナチズムの姿勢がある。)また、ティリング(Magdalene von Tiling 1877-1974)は、福音はすべての教育に対する躰きとして見られ、新たな目標、道を示すべきであると考えた。コルディール(Leopold Cordier 1887-1939)は、我と汝の二項関係である人間学的教育学と比べ、神を中心とした(theozentrisch)教育では、若者を神の前の現実性へ踏み出させる我と汝、神からなる三項関係であり、二項関係を乗り越えていると言及する。

1940年代、特に米国において福音と教育をめぐる議論は、自由主義神学の立場とネオ・オーソドックスとの対立に顕著にみられる。ハリソン・エリオッ

ト (Harrison Elliott) は、ネオ・オーソドックスは、キリスト者以外の者に対して不寛容であり、信仰と理性を切り離していると批判した。人間の知識はキリスト教理解にとって適切なものであるという立場をとる。³ また、彼は弁証法神学の罪意識は、厳格で独裁的な権威のある場所でこそ意義があり、米国には適さないと考えた。⁴ ネオ・オーソドックスの立場をとるシェルトン・スミス (H.Schelton Smith) は、神的なもの与人間的なものとの区別、すなわち宗教教育と一般的教育を区別する立場をとる。彼は、自由主義神学は人間の現象面ばかりを扱い、実存の根底を曖昧にしていると批判した。さらに、イエスの悔い改めの呼びかけの中に、神の国の根本的原理がある、と考えた。⁵ また、「イエス・キリストの中に明らかにされる存在の究極的な意味における啓示の観念が、自由主義の立場をとる教育者には、全く無縁である。」と批判した。⁶

1957年、自由主義神学とネオ・オーソドックスの両者を調停する立場をとるミラーは、『関係の教育』(Education for Christian Living) を著した。その中で彼は、人格や教育対象のニードを尊重し、教育学や心理学をキリスト教教育に活用できる路を開いた。他方、贖罪論、救済史に即した神学的原理を諸科学よりも重視した。キリスト教教育の教育内容や方法、目的を導くのは、神学であり⁷、その下でのみ心理学等、諸科学を用いることが許されると考えた。彼は、聖書が語る契約は、民と神との間にあるものであり、キリスト教教育は、社会的家庭の中に起こると主張する。そこにおいて、デューイの教育学が活かされると考えた。⁸ 神の教えは具体的な日常経験に即したものとして説かれて初めてその人のものになる、という。彼の理論において、福音と教育の接点には人格がある。人格に神の恩寵を受け取る可能性があるとしてミラーは考えた。その可能性を保証するものは、主体的信仰である。⁹ これは、人間の自由意志によって、神との関係を壊し、人間はその関係を自ら回復できない。キリストにおける神によってこそ、可能である。つまり、恩寵の受容である。¹⁰ このようなミラーの人格理解について、小樋井は、いかなる信仰も神の恩寵への準備や前提として考えられてはならず、ミラーはまだ自由主義神学を温存しようとしているのでは、と疑問を呈している。¹¹

同じく1950年代、ロッツが編集し、日本のキリスト教教育理論の形成に

も大きな影響を与えた『宗教教育指南』(Orientation in Religious Education, 1950)には、キリスト教教育の目的と意味が次のように記されていた。(ここでは、「宗教教育」をキリスト教教育として説明している。)[社会においても教育においても最善なことは、すべての人々にキリスト教信仰を広めることである。宗教教育は、子どもや大人がキリストにおける神による救いの生き生きとした経験に導かれることを助けるすべての努力や過程を含んでいる。]¹²

1960年代、米国では、「キリスト教教育」(Christian education)は「宗教教育」(religious education)とほぼ同義に用いられてきたが、徐々にキリスト教教育も一般的に使用されるようになった。¹³ また、英語の religious education の訳語として、日本では1950年頃からキリスト教会の教育的活動という広い意味で「キリスト教教育」を用いるようになった。(ただし、「基督教教育」という言葉が初めて登場したのは、1910年「基督教教育同盟会」¹⁴の発足時においてである。)1958年に出版された『キリスト教教育講座』(第2巻キリスト教教育の原理)において、北森嘉蔵は、キリスト教教育を教会教育と同義に捉え、さらに広く「キリスト教的人間形成」と呼んだ。彼によれば、信仰告白にいたるまでを狭義のキリスト教教育に、告白後の信徒訓練を含め、キリスト教的人間形成全体を広義のキリスト教教育に分けて位置づけた。¹⁵ 同様に、小林公一もキリスト教教育と教会教育を等しく考えた。それによれば、「教会教育とは、教会が神から委託された宣教の業を教育的に行うことを意味する。」という。これは、キリスト教教育が、「教会の宣教の業を教育的に行う」こと、つまり、教会の教育的機能としてキリスト教教育を捉えることを同時に意味する。また、高崎毅は、教会の宣教によって行われるキリスト教教育を、教会のみにとどまらず、「無意図的・無意識的に人間に影響を与え変化させるすべての働きを含んでいる」と捉えた。その「働き」の場には、施設や機関なども含まれている。

1982年にシーモア(Jack L.Seymour)とD.ミラー(Donald E.Miller)がまとめた「現代におけるキリスト教教育理論」によれば、5つのアプローチが示されている。その第一は、宗教としてのキリスト教の伝達とその理解・実践を目的とした宗教教授の理論(サラ・リトル)。第二は、人々が信仰と出会い、

信仰に基づくライフスタイルを学習する共同体としての教会の形成を目的とした信仰共同体の理論（チャールズ・R・フォスター）。第三は、人々が信仰によって霊的、精神的成熟へと成長することを可能とすることを目的とする霊的、精神的発達理論（ドナルド・E・ミラー）。第四は、教会と人々の解放と人間化を求めての変革を目的とした理論（アレン・J・モアー）¹⁶。第五に、キリスト教的展望と実践の現代における諸経験との関連付けを目的とした理論（J.L. シーモア・キャロル・ウェールハイム）。

信仰共同体を中心とした理論に属するフォスターは、教会教育の克服すべき点をいくつか挙げ、その主な三つは、教育の内容・方法・目的に関わるものであった。すなわち、基礎的知識に関する共通理解の欠如、教授法の問題、そして目的の喪失である。教育内容については、フォスターは、この欠如は、「教会のアイデンティティーの問題である」と深刻に受け止めている。グループは、「教育的活動の原理についての共通理解などほとんどない」と批判している¹⁷。ウェブミッシュェルは、教会文化の様々な要素がキリスト教教育の内容を構成すると考えた。また、カリキュラムに関して、ウェスターホフ（John H. Westerhoff）¹⁸ は「学校教授型パラダイム」で教えられるのではなく、共同体の活動全体でキリスト教教育を捉えるべきとの立場をとった。そこで、彼は潜在的カリキュラムの意義を主張した。教育方法の問題については、フォスターは、聖職者・神学者たちが信徒にわかるように聖書解釈や神学的知識の伝達を行っていないと批判する。方法について、グループが対話を通して展開される「プラクシス教育論（educational praxis）」を考案し、パウル・フレイレが「銀行型教育」と呼んだ教育と対称的な方法を展開した。三つ目の克服点である目的の喪失について、フォスターは、教育そのものを「変容（transformation）」なのか、それとも「催し物（entertainment）」と捉えるか、という問いを立てている。前者の例として、人生の危機的状況の中で自己を深く見つめ、神の恵みを見出し、自己を解放させる理論（ジェームズ・ローダー）がある。後者は、教育プログラムが「カフェテリア方式」でリストアップされ、自分に合ったものを選び、その中で神を賛美し、感動的な体験をするものである。¹⁹ これまでのキリスト教教育の目的は、比較的個人の問題の解決に重点が置かれていた。

ウェブミッシェルは、共同体の形成により重点を置くべきであると考え、「真理について語り、互いに仕え合い、キリストの体としての誠実なメンバーであり続けること」が教会におけるキリスト教教育の目的であると主張している。

教会とつながる共同体の一つに、キリスト教学校がある。日本において、1987年にキリスト教学校に関わる教師や牧師らによって結成された学校伝道研究会が『教育の神学』を出版した。その後、第2集（1997年）、第3集（2006年）と継続された。それらは、個々のキリスト教教育の現場を見据えつつ、神学的に考察する試みをまとめた論集であった。その中で、大木英夫は、キリスト教教育学は、教育学者によるキリスト教教育という「特殊教育学分野」の学問であった、と批判し、神学者、牧師が教育について、神学的に取り組むべきであると主張した。この主張の背景には、1930年代にバルト神学が日本に紹介され、その神学がもたらした「破壊的問い」、すなわち、「キリスト教教育というものは果たして可能か」（桑田秀延）という問題であった。また、佐藤敏夫は、キリスト教教育に関する理論化の試みとして「キリスト教文化倫理学」を形成する観点から論じた。キリスト教学校教育の観点では、1993年に、松川成夫は、キリスト教教育の目的を「福音に根差した真の人間形成」と捉えた。それは、従来の信仰共同体中心に拡張していく理論から、広く人間形成に関わる「キリスト教に基づく教育」としてキリスト教教育を捉え直す試みであった。

同様に、1990年代は、キリスト教信仰の共同体だけではなく、社会の多様性を無視することができなくなった時代でもある。それは、海外のキリスト教教育理論の中にも明らかに見出せる。例えば、米国では、ブレッケンリッジ（Lillian Breckenridge）がキリスト教教育の目標として次の6つを掲げた。

1. 文化的多様性の認識を高めること。
2. 地元根差した教会における取組と姿勢を評価すること。
3. 教会と共同体の中で民族間での関係づくりを積極的に促すこと。
4. 学習環境や異文化間交流のための相互文化的な技術を発達させること。
5. 親たちが子どもたちに他者における多様性を理解し評価するように支援すること。
6. 不平等を減らすための社会的責任感を育て、少数派に属する人たちのための正義を促進すること。

社会の多様性への対応は、すでにその兆しが1970年代、日本の教会学校カ

リキュラムの構想において、「教会内、外のキリストの支配の下にあるすべての人々」が対象とされていたことにも見られる。しかし、70年代ではまだ、「キリストの支配の下」にあるように、信仰共同体の拡張が目指されていた。1990年代以降、宗教多元主義の立場が研究されるようになると（G・デコスタ、J・B・カブ、ユルゲン・モルトマン等）キリスト教だけではなく、他宗教との対話において、互いの教育の在り方を振り返るアプローチが生まれてきた。これは、間宗教的教育（interreligious education）（Johannes Lähnemann 他）または、多宗教的教育（multireligious education）と呼ばれている。

今日のキリスト教教育学は、教会という信仰共同体内部の教育だけではなく、共同体の外にある多・他宗教からの対話も求められている。また、共同体や宗教とかわりなく、グローバルな規模で対話や対立が生じている現代社会の現実がある。そのため、キリスト教教育学は、キリスト教神学に基づいた伝統的な実践神学の一分野の枠内にとどまることはできない。キリスト教という宗教的な立場を堅持しつつ、現代社会における生活の様々な場面における諸問題を、総合的に探究する学問として、さらに成熟していかなければならない。

（本稿は、日本基督教学会の編集委員会による『新版キリスト教大事典』（教文館 発刊予定）に掲載される「キリスト教教育学」の項目作成準備に際し、新たに註と参考文献を追加し、説明を加えたものである。）

<参考文献>

- Elliott, Harrison (1949): *Can religious education be Christian?*, Macmillan, New York
- Faber, Hermann (1934): *Religionspädagogische Probleme*, in: *Theologische Rundschau*, Neue Folge. Vol.6, No.1, J. C. B. Mohr, 33-60
- Groome, Thomas H. (1981): *Christian Religious Education*, Harper & Row, New York
- Lotz, Philip Henry (ed.) (1950): *Orientation in Religious Education*, Abingdon-Cokesbury Press, New York, Nashville.
- Michael J. Anthony (ed.) (2001): *Introducing Christian education: foundations for the twenty-first century*, Baker Academic, Grand Rapids, Mich.
- Miller, Randolph Crump (1956): *Biblical Theology and Christian Education*, Charles

Scribner's, New York

----- (1963): *Education for Christian Living*, Prentice-Hall, (2nd.ed.)

Englewood Cliffs, NJ. (1st.ed. 1957)

Smith, H. Shelton (1950): *Faith and Nurture*, Charles Scribner's, New York.

アウグスティヌス (1993)『教えの手ほどき』(De Catechizandis Rudibus) (熊谷賢二訳)
創文社 (キリスト教古典叢書 上智大学神学部編 P. ネメシエギ責任編集; 4) 第3
刷 (1964 初版)

学校伝道研究会 (1987)『教育の神学』ヨルダン社

小樋井 滋 (1996)『バルト神学と宗教教育』ヨルダン社

小見のぞみ (2010)「H. ブッシュネル『キリスト教養育』 解題からの考察：今日のキリス
ト教保育論の形成にむけて」聖和論集 38 号, pp.29-38

深谷潤 (2013)『現代日本プロテスタント・キリスト教教育理論の変遷』中川書店

ジャック・L・シーモア編 (1987)『キリスト教教育の現代的展開』(奥田和弘・西垣
二一訳) 新教出版社

高崎毅・太田俊雄監修 (1958)『キリスト教教育講座 第2巻 キリスト教教育の原理』
新教出版社

ブレット・ウェブミッシェル (2019)『キリスト的ジェスチャー』(伊藤悟訳) 一麦出版
社

R・C・ミラー (1971)『関係の教育：キリスト教教育概説』(柳原光監訳) 新教出版社

<註>

¹ cf. アウグスティヌス 1993,

カルタゴの助祭デオグラチアスに対し、アウグスティヌスがキリスト者になろうとして初めて教会を訪れた人々に対する対応方法を説明したもの。例えば、「教理を教える人が喜びの心をもって教える」には「神の慈しみ」によることである。(2章) また、教育目的は、万事において愛を目指すことである。(3章) 「自分が愛されていることを知ると、愛するように駆り立てられる」(4章)。不適切な動機でキリスト者になろうとする者に対して、「親切に、やさしく叱責」し、キリスト教の教義の真の目的を示すこと、その際、「簡単に厳粛」な説明にすること等が言及されている。

² 小見, p.30

³ Elliott 1949, p.128

⁴ *ibid.*, p.166

⁵ Smith1950, p.116

⁶ *ibid.*, p.107

⁷ Miller1963, p.60

⁸ *ibid.*, p.71 また、デューイの生活中心の方法 (life-centered method) を採り入れた。(pp.187-189)

- ⁹ ibid., p.66
- ¹⁰ Miller1956, p.18
- ¹¹ 小樋井 1996, p.143
- ¹² Lotz1950, p.94
- ¹³ 小樋井 1996, p.115-116
- ¹⁴ 1899年に宗教教育を禁じる法令（文部省訓令第12号）が発令された。それに反対し、キリスト教教育を守るために、キリスト教学校が協力し合ったことを契機に、1910年に男子校10数校が「基督教教育同盟」を組織した。初代会長は原田助（同志社総長。この組織が現在のキリスト教学校教育同盟の端緒となる。
（キリスト教学校教育同盟ホームページ参照 <http://www.k-doumei.or.jp>）
- ¹⁵ 北森は、この「人間形成」を「教育」と呼ぶことに若干慎重な姿勢をとっている。（高崎・太田 1958, p.172）
- ¹⁶ cf. シーモア 1987, モアアは、P. フレイレの「解放の教育」を基にしつつ、ライフスタイルの問題がキリスト教教育において提示されねばならない、と主張する。（p.155）それは、全地球的な次元から人間の生活を見る新しい意識が必要とされることを意味している。（p.162）
- ¹⁷ Groome 1981, p.20
- ¹⁸ 彼の理論は、以下の翻訳で参照できる。『子どもの信仰と教会』（奥田和弘訳）新教出版社 1981年、『親と子の信仰生活』（茂純子・西尾操訳）日本基督教団出版局 1998年
- ¹⁹ cf. Charles Foster (1994): *Educating Congregations*, Nashville: Abingdon, p.29